

理科・社会通信



光華小学校 5・6年生向け 令和6年度 1学期折り返し号 担当：矢野 雅東

1学期、はやくも半分が過ぎました

昔から、算数・数学は苦手なくせにカレンダーを見たり小遣い張をつけたりといったことだけは好きな矢野先生なので、今でも年間行事予定カレンダーを日々眺め、夏休みまであと何日授業するのかなあと考えています。あくまで矢野調べですが、5・6年生とも5月30日で今学期の授業日はちょうど半分（35日）となり、翌日からは後半戦となります。

始業式（新学年・新学級・新担任）から入学式、花まつり、大型連休に土曜参観、遠足に修学旅行と、けっこうこの前半戦だけでも濃密な時間を過ごしたことと思います。ここから夏休みまでの日々も、今のこの一日、一時間、一瞬をかけがえのないもの、貴重なもの、二度とやり直せないものと思って過ごしてください。特に6年生は、光華小学校でこの時期を過ごすことはもうありません。（かつての名物校長・櫻井 成先生の口癖）

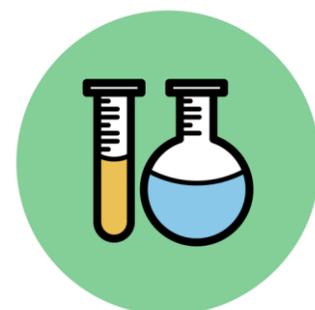


各学年：既習の内容に対する雑感

5年理科・・・4年時に教えたメダカの単元テストが今月にずれ込んでしまい失礼しました。保健室の森先生の家からメダカやたまごをもらったので、またいつでも理科室まで観察に来てください。続く天気や台風の話は、みなさん毎日のTVや新聞で見る天気予報でおなじみのこと。偏西風や貿易風、台風の決まり（うず巻きへの向き）など、忘れずに覚えておくように。家でも実験できることは何でもやってみよう！植物系では昨年のヘチマが成功したのに味をしめて今年はヒョウタンを絶賛栽培中。みなさんも水やり・掃除等のお手伝いを。インゲンマメの発芽とヨウ素液実験も一応成功かと。



6年理科・・・昨年の6年生では実験道具が不足で難儀しましたが、昨年度予算で酸素や二酸化炭素、気体検知管や底にも穴のあいた集気びんを購入しておいたおかげで今年度は楽に実験ができました（自分で自分をほめてやりたい）。この世にある全ての物はわずかに120種類ほどの元素からできているという事実に感動してください。そして近い将来、中学高校生になったみなさんはきっと全員、いつも白衣を着た理科の教員から化学反応式を「いやになるほど」叩き込まれることなのでしょうからご愁傷様、いえいえお楽しみに！（矢野先生は撃沈しました。合掌）次はヒトの体！胃潰瘍や胆石など、消化器官のことなら任せて！



6年社会・・・学校や家庭で少々のやなことがあっても、みなさんに日本の歴史を教える時間があればすべて忘れることができます。縄文弥生の昔から、人は他人と比べ、競い、よりよい結果を求め続けてきたのです。大王が、物部氏や蘇我氏が、そして聖徳太子や天智天皇が造った古墳・寺・都などなど、21世紀の現在でもたくさん残っているわが国のありがたさを噛みしめてほしいものです。法隆寺の柱のエンタシス、東大寺大仏、飛鳥の石舞台古墳や高松塚古墳などにも、本当は皆さんを連れて現地を案内したいほどですが、そんな時間も余裕もないですな。また夏休みにでもぜひ行ってみてください。6年生の何人かが、飛鳥や奈良に興味を持ってきているのを聞くだけでも冥利なことです。次は奈良・長岡京そして平安時代！「あおによし奈良の都は咲く花の におうがごとく今盛りなり」
「いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重にほひぬるかな」



（明日香村・おすすめのポイント）

○亀石 ○橘寺 ○伝飛鳥板蓋宮あと ○石舞台古墳 ○飛鳥寺・飛鳥大仏・入鹿首塚 ○岡寺
○天武・持統合葬陵 ○高松塚古墳 ○甘檜丘 ○酒船石 （○ちょっと郊外ですが談山神社）

※現地ではレンタサイクルが便利です。中1だった矢野少年は自宅からチャリンコで行って大後悔したよ。

（理科通信 1学期折り返し号 2024.5.30）

6月の「おまけ」(私を育てた大人シリーズ・全3回の1)

母について ～「春日局」という二つ名がありました～

矢野 雅東

(ご注意)

「私を育てた大人シリーズ」、あくまでも「おまけのページ」ですので、ご興味を持ってくださる方のみお読み頂ければ幸いです。昨年度3年2組・一昨年度6年2組関係の方には二番煎じの内容です。

今の6年生の児童にとり、「お母さん」とはどんな存在でしょうか?などと聞いてみても、それは各々接し方・教育方針・家庭環境などが違うので、一口には表現できないでしょうね。参考になるかどうか分かりませんが(おそらくならないでしょう)、うちの母親のことをお話させていただきます。「お母さんなんて、ガミガミうるさくていやや。」と思っている人へ。ガミガミ言うのは、まだまだとってもやさしいお母さんなのですよ。本当に「怖い」お母さんというのではすね……

うちの母は昭和17年生まれの戦中世代。私のばあちゃんの一人娘です。かなり早くに父(つまりじいちゃん)をなくしたため、母一人子一人で育ったそうです。ばあちゃんによれば、父親がいないことで、自分を卑下したり不便を感じさせたりすることがないよう、勉強にも運動にもかなり厳しく仕込んだおかげで、誰に対しても一步も引かない、極めて負けず嫌いな女性に成長してしまっていたのです。大学卒業後すぐから約40年間、一度も転勤せずに京大理学部の数学事務室に勤めておりましたが、その40年の内、少なくとも後半の20年は事務室のボスとして君臨し、部下は勿論、とてもえらい教授であろうと10代の学生であろうと、自分の常識に合わない人・自分の基準に照らしてみても間違っている人には、容赦なく叱っている姿を、私も時々見ていました。(事務員の若い女の子などは、母にきつく言われてよく泣いていました。おお、かわいそうに……)その剛腕さゆえに、家をついたアダ名が「春日局」。

他人にさえこれほど厳しい母が、我が子(つまり私)のしつけや教育に関して、遠慮したり手心を加えたりなどといったことをするはずはありません。私は物心ついた時から、そんな母にしょっちゅう怒られ、叱られ、泣かされてきました。当時、私の家の近所には子供も多く、何の不自由も問題もなく地元の公立小学校に通っていた私を、「中学受験させるから」という母の鶴の一声により、いきなりここ(光華小学校)へ転校させたのも母でした。自分の身に何が起こったのか分からないまま、私はその日を境に、制服を着て阪急電車で通学する身になったのです。われながら、よくグレなかったと感心します。

他人に負けることが嫌いな母は、私の成績についても全く情け容赦はありませんでした。学校の学期ごとの成績にせよ塾での毎月の成績にせよ、「1番でないダメ、2番以下はビリと一緒に」という思想の人でした。1番だった時だけがおとがめなし(褒めたりは決してしません)で、それ以外だった場合は、冷やかな目で睨まれ、数日間、話もしてくれませんでした。ガミガミ怒られるよりも怖いものがあることを、私は母を通じて知ったのです。以後、「何とか母を見返してやろう。」「母に『参った』と言わせよう。」などという不純な理由で、せっせと勉強していたことを記憶しております。

ただ救いだったのは、この母は、勉強の中身や方法については、一切タッチしない人だったことです。「勉強はお前自身が、学校や塾の先生から教わればよい。宿題や家での学習は、自分で考えてやれ。私は仕事でいそがしいから。」が口ぐせでしたし、実際、勉強に関しては、全く自由にさせてもらえました。ですから私は、学校からもらうお便りや返却されたテストなど、全くと言っていいほど、親には見せませんでした。自分で時間割などの用意をし、自分で間違い直しをしたら、そういったプリント類はそのまま捨てていました。

(個人懇談でも、母は自分の代わりに私を行かせたりしました。私はよく、よそのお母さんにはさまれて、教室外の廊下の椅子にすわって懇談の順番を待っていました。あんまりですよ。)

今にして思えば、単身赴任で不在だった父の代わりに、ほぼ一人で子どもの面倒を見るためには、かけられる手間や時間も乏しく、勢い、朝や晩の短い時間の中でビシビシしごくより子育ての方法がなかったのでしょうかし、その結果、子どもたち(私と姉)は、反抗期はなかったものの、常に母のことを「怖くて、煙たい人」としてしか見ず、一般の母と子のような親密な関係には戻れなくなってしまいました。私たちはともかく、母の身になってみた時、全く子ども(つまり私)がなつかなかったので、気の毒な気もしています。

そんな母も還暦を過ぎ、退職もし、少しは丸くなるかと思いきや、電車内でマナーの悪い人を遠慮なく叱ったり(見ているこちらの方があせります)、すぐ近所に住む40過ぎにもなる息子(私)をつかまえては「アンタが毎日帰りが遅いのは、仕事の要領が悪いからや!」などと、言いたい放題言うのは全く衰えを見せません。「何も知らんくせに、オカン腹立つわ～」と思いながらも、変に老いぼれて丸くなるよりはいいかなと、変な話ですが、ボロクソに言われる

ことで、私はちょっと安心しておりました。(母子が常にそうした緊張関係にあるせいで、逆に私たち夫婦や嫁姑の関係が自然と円満に保てるという「いいこと」もあります。)

何より、私が母に対し、絶対に勝てない点・・・それは、1年 365 日を通じて、絶対に私より早起きで、夜きちんと寝るまで、ゴロゴロしたり居眠りしたりという姿を見せたことがないということです(多くのご家庭もそうではないですか?)。これは簡単なようで、実はかなり難しいことです。私には真似できません。

他人に厳しくせに自分に甘い人は世の中に多いでしょうが、母のように、他人には厳しく、且つ、自分に対しても他人以上に厳しい人はおそらく少ないでしょう。私が母に暴言をはいたり手を挙げたりできなかった最も大きな理由は、そのあたりにあるのかも知れません。友人の家に遊びに行くたびに「この家、広くてうらやましい。」と思い続けていた私ですが、「この子のお母さんが、うちのお母さんやったらよかったのに。」という思いは、不思議と持ったことがありません。それだけ、実はいい母なのかも知れず、従って私は幸せだったということでしょうか?(実感は湧きませんが。)

最後に1つ、母との忘れられないエピソードを。

私が中学生のころ、近所の同級生がスーパーで万引きをしてしまい、その家のお父さんが警察に息子を引き取りに行く間、半狂乱になっている母親を残していくのは心配だからというので、うちの母に付き添いを頼んだことがありました。母は(自分だけではいやだったからでしょうが)私を連れていったのでした(迷惑な・・・)。その家でそのお母さんを、2人してなだめたりなぐさめたりしてから、深夜にやっと本人たちが帰ってきて、私たち母子も解放されたのですが、その歩いて帰る道々、私がふざけて「もし俺が警察の厄介になったら、どうする?」と聞いてみました。「そんなん、即勘当や。親子の縁を切るわ!」というコメントを予期していたのですが、その時母は急に立ち止まり、「・・・きつと、途方にくれるやろうねえ。」と、いつになく妙にしんみりした調子でつぶやいたのでした。聞いた私の方がちょっと気まずくなり、それから家まで、2人とも深い沈黙のまま歩いて帰ったのでした。

とても星のきれいな、夏の夜のことでした。(2004年初出、今回一部改訂。)

そして2016年秋、せつかな母は74才で自宅にて死去。次ページはその年の末に「喪中なので年賀状はいらないです」という意味で当時担任していた6年生とその保護者の方向けに書いた母の葬儀前後の記録です。こちらもよかったです。

「無縁坂」 作詞/作曲 さだまさし

母がまだ若い頃 僕の手をひいて
この坂を登る度 いつもため息をついた
ため息つけば それで済む
後だけは見ちゃだめと
笑ってた白い手は とてもやわらかだった

運がいいとか 悪いとか
人は時々 口にするけど
そうゆうことって確かにあると
あなたをみててそう思う

忍ぶ不忍 無縁坂 かみしめる様な
ささやかな 僕の母の人生

いつかしら僕よりも 母は小さくなった
知らぬまに白い手は とても小さくなった
母はすべてを暦に刻んで
流して来たんだらう
悲しさや苦しきは きつとあったはずなのに

運がいいとか 悪いとか
人は時々 口にするけど
めぐる暦は季節の中で
漂い乍ら過ぎてゆく

忍ぶ不忍 無縁坂 かみしめる様な
ささやかな 僕の母の人生

育ての母であった祖母が 96 才で大往生してからちょうど 10 年、ちょうど同じ 10 月に、今度は生みの母が他界し、バタバタのうちに通夜・葬式・火葬・忌明け（四十九日）が終わり、ますますひと段落いたしました。10/3 の月曜日、忌引きでお休みを頂いたため、予定していた社会の授業ができなかったことを改めてお詫びいたします。

・・・思えば、とても変わった母子関係でした。大学の事務官を 40 年ほど勤めて、平日昼間は全く家にいなかった母、休日や日曜でも外出することが多く、こちらにも習い事が多かったためすれ違いの生活が当たり前の親子でした。おかげで私たち姉弟は一切母に依存しない子に成長し、同時に母に対する親愛の情も、一般の家庭におけるその 1 割程度しか湧かないという不孝者に育ってしまったのでした。以前にも書いたかも知れませんが、母は手加減や情け容赦を一切認めない人でしたので、他人であろうと家族であろうと、そしておそらく自分自身に対しても、それはそれは厳しいルールや結果を求める人でした。私がどうにか進学・卒業・就職・結婚などなどが人並みにできた裏には「失敗したら、母に何と言われることか・・・」という強迫観念が無意識のうちに介在していたこと、確実でしょう。

長年働いていた職場が骨董品のように古い校舎だったせい（アスベスト？）でしょうか、1 年半ほど前から肺の調子がおかしくなり、あちこちの病院で検査しても不明だった病名がどうやら「中皮腫」だと分かった時にはもうやや手遅れで、それから半年、10 月 1 日の夜に自宅（実家）で息を引き取りました。享年 74。往診されたお医者さんから「夜中か、遅くても明け方には・・・」と言われ、これは寝ずの番になると思い、風呂に入るべく私が一旦自宅に帰っていた間に息を引き取るという、せっかちというか最後まで私を不孝者にしてというか・・・でもまあ「お前の世話にはならん！」という、ある意味母らしい意志を貫いた最期であったと思います。

私たち子供のみならず、2 人の孫に対してもあまり猫かわいがりしない母（おそらく、かわいがり方がよく分からなかったのでは？）でしたが、湯灌から納棺、通夜、葬式そして火葬、骨あげなどなど、滅多にできない体験を 2 人の息子にさせられたこと（母が身をもって教材となってくれたこと・火葬場で私が図らずも骨の位置や名前を教えられたこと・それで葬儀場の人に注意されたこと・・・）は、今回一番の収穫だったと思います。息子（小学生）2 人には、よい勉強になったかと。「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」という格言がありますが、うちの母はどちらかという虎の方でしょう。

その後、忌明けまでは毎晩、今は週に一度ですが、家族で実家に線香をあげに通っています。子どもら 2 人、いつ覚えたのか、般若心経を神妙に読むようになり、これも 1 つの怪我の功名、2 人にとっては祖母にあたる仏様も、年齢的にはまだ早かったとはいえ、これをもって瞑すべしです。

私はといえば、上記の通り、生前は花もプレゼントも感謝の言葉も贈った記憶がなく、性格が似たもの同士、会えば必ず口喧嘩していたものですが、通夜の晩、一人で棺桶の番をしていた時に「母さんよ、私は親不孝やったか？冷たい息子であったか？」と、酔っ払いながらも問いかけていました。勿論返事などありませんでしたが、それでもはるか昔、「生徒さんが学校に来る日に一日でも休むような人間は教師の資格などない！」という母のいいつけを今月までどうにか守ってきた息子を、生きている内に少しでいいから褒めてほしかったなど、贅沢なことを考えているのです。職場でも家庭でも、褒めたり叱ったりしてくれる人がいなくなるのは寂しいですね。

奨学会・幸手会など何人かの保護者の方々には様々なお気遣いを頂き、大変恐縮しております。ありがとうございました。（中には「大丈夫！私らがいくらでも母親代わりしてあげるから！」という、力強いお申し出もあり、とっても困惑、いえ、有難いことです・・・）



（児童のみなさんへ）ということで、年賀状は特にいりません。でも出してくれるなら喜んで受けとります。返事も出します。あと、「孝行のしたい時分に親はなし、墓に布団はかけられず」ですよ。私が見本。さだまさしの『無縁坂』や百恵ちゃんの『秋桜』聞いては感慨無量なこの頃です。

(2016.12)

（翌年 4 月 9 日の日記より）

半年前に亡くなった母の納骨。今年は桜が長もちしたおかげで、お墓のある寺の桜も散り始めの段階。お骨箱（けっこう重い）かかえて歩く私の上にも花びらちらちら舞い、ガキの頃からずっとすれ違いで疎遠な母子関係だった私たち 2 人が一緒にお花見しているような気分。骨になった後でなく、生きてて元気なうちに一度でも、オカンと花見をしておけばよかったなど後悔。オカン、あなたから見て、今の私はまっとうに生きていますか？

最後まで目を通して頂いた方は、ありがとうございました。